

ベトナム・ダラットにおけるコーヒー生産の現状と課題
―世代を超えて変化する生産者の意識と高付加価値化に向けた取り組み―

令和4年度入学

人文社会科学部昼間主コース

グローバル・スタディーズ履修コース

主指導教員名：藤村瞳

氏名：岡村愛美

ベトナムは現在、世界第2位のコーヒー生産国であり、特にロブスタ種の主要生産国として、国際市場において重要な地位を占めている。近年では、国際価格の高騰やヨーロッパ市場での需要増加を背景に、ベトナム産コーヒーの輸出量および輸出額は過去最高を更新している。また、日本市場においてもベトナム産コーヒーの存在感は年々高まりつつある (Vietnam Coffee Cocoa Association)。

一方で、コーヒー生産の拡大は生産者の生活向上に直結してきたわけではない。先行研究では、ドイモイ政策以降の生産拡大や品質向上に向けた取り組み、生産拡大に伴う格差が生じていたことが明らかにされた。しかし、これらの研究ではインタビューの対象が主に企業経営者に限られており、現場で働く生産者に焦点を当てた分析が不十分である。さらに、フェアトレードやグローバル市場への言及も不足しており、国際価格やサプライチェーンなどの関連について十分に検討されていない。

こうした点を乗り越えるべく、本研究では、ベトナム・ダラットを調査地とし、(1) ベトナム・ダラットにおけるコーヒー産業に従事する生産者の意識は、世代を超えてどのように変化してきたのか (2) 持続的なコーヒー生産の未来像に向け、どのような課題が存在し、何が求められるのか、という問いを設定し、生産者及び農園代表者のインタビューを通じて、ベトナムのコーヒー栽培の現状と課題を多角的に明らかにすることを目的とした。また、フェアトレードの課題を批判的に検討し、ベトナムのコーヒー生産の将来的な発展の可能性を考察する。

ベトナムのコーヒー生産は、フランス植民地期に導入され、ドイモイ政策以降に急速に拡大した。現在、生産の約95%を安価なロブスタ種が占めており、主に中部高原地域で栽培される (浅岡.2012)。中部高原は農業依存度が高く、多数の少数民族が暮らす地域である。調査地であるダラットは、標高が高く冷涼な気候で、近年ではハイテク農業や観光地として発展が進んでいる。中部高原には、ベトナムの国民国家が形成されて以降、政府による開発や多数民族の入植により支配の対象とされてきた歴史がある (新江.2007)。本研究で調査対

象となるクホー族は、中部高原に古くから居住する先住民族である。クホー族は伝統的に多神教であったが、20世紀初頭以降キリスト教が普及した結果、多くの人々がカトリックやプロテスタントに改宗した (Nguyen& Nguyen.2024)。

本調査は2025年9月、ダラットにおいて実施した。インタビューの協力者は、コーヒー農園を経営する日本人経営者(45歳男性)、同農園で就労する少数民族のA氏(68歳男性)、B氏(44歳男性)、C氏(19歳男性)、D氏(27歳男性)の四名、さらに地域の牧師E氏(65歳男性)である。少数民族への聞き取りは、発言の自由を確保するため、原則として日本人経営者の同席を避けて行った。インタビューは個人々の生活実態や経験を柔軟に引き出すため、半構造化面接法を用いて行った。日本人経営者への質問では、経営者としての立場から農園の労働者との関わり方や労働環境、ならびにコーヒー業界全体の構造や認識、クホー族の特徴を把握することを目的とした。次に、少数民族への質問に関しては、仕事への向き合い方や考え方を中心に労働者の立場から実態を明らかにするために質問を設定した。最後に、牧師への質問は、地域に長く暮らしている立場を踏まえ、地域社会やコーヒー栽培の始まりについて調査することを企図した。

本論文では、インタビュー対象者六名を年齢やコーヒー産業に従事している年数を踏まえ、三つの世代に分類した。世代の分類として、ダラットでコーヒー栽培を始めたA氏、E氏を第一世代とする。次に、日本人経営者と共に生産を始めたB氏を第二世代とする。最後に、グローバル化した時代に栽培を始めたC氏、D氏を第三世代とする。以下が世代の特徴である。

第一世代(A氏、E氏)は、長いコーヒー栽培の経験の間でコーヒー栽培との付き合い方を変化させてきた世代である。栽培初期は生活の安定を目的としていたが、日本人経営者との関わりを通じて高品質生産へと意識を変化させた。第二世代(B氏)は、精製を導入した地域の先駆者的な世代である。栽培技術や品質管理への意識が芽生え、コーヒー豆を収入源として捉えている。第三世代(C氏、D氏)は多様な将来像を志向する世代である。市場や消費者を意識しつつ、第一世代と異なり、自身の意思で移動・就労するなどより多様な生き方を模索していた。

インタビュー調査の結果、コーヒー栽培に対する考え方や向き合い方には、世代間でコーヒー栽培の目的、市場及びコーヒー価格に対する意識の違い、外部との関係性の在り方といった三つの点で大きな差があることが明らかになった。一点目はコーヒー栽培の目的である。この意識の違いには、経済構造や国内情勢の変化が影響していると考えられる。第一世代は政府による支配を経験しており、「生活」のために農業に従事し選択肢が限られた中で生きていた。一方で、第二世代及び第三世代の人々は、多様な選択肢の中から仕事を選び従事する。戦争の終結後、多様な生き方が可能となった現在、コーヒー栽培に携わる動機づけに変化が見られるようになった。

二点目は、市場およびコーヒーの価格に対する意識の違いだ。第一世代はコーヒーの価格に対して、外部の機関によって決められるものであり、自身が関与できないものとして捉え

ていた。第二世代は、品質と価格を理解し、栽培方法を工夫することで高価値にすることが可能と認識している。第三世代は、アジア最大級のコーヒーイベント SCAJ2025 に参加し、コーヒーの価値の向上に努めていた。第一世代と第三世代の違いは、市場との接点の有無のみでなく、参加している市場そのものの性質が異なっている点である。グローバルなサプライチェーンへの参加が、コーヒー生産の意識や市場への関心の差を生み出した。

三点目は、外部との関係性の在り方である。第一世代は、戦争の終結後も政府の支配の下暮らししており、外部との積極的な関係性は構築されなかった。一方で、第二世代及び第三世代は外国人経営者を受け入れ、指導者、協働相手、支援者としての位置づけから関係を築いている。また、イベントへの参加により、先にいる消費者を意識している。その背景にも、国家による統治やドイモイ政策への移行、さらにグローバル化によって、個人や市場との関係の構築が以前に比べてより容易になったことがあるだろう。政府による少数民族への強制移住などの支配が終わり、クホー族が外部と関わる機会を得たことで、社会構造が変化し、それに伴い他者との関係性が変化したと考察する。

最後に、時代の変遷に関わらず共通して見受けられた点として、将来像や仕事への意欲が挙げられる。E 氏（第一世代）、B 氏（第二世代）、D 氏（第三世代）のように、コーヒー栽培に強い意志をもって従事する者がいる一方で、A 氏（第一世代）や C 氏（第三世代）は「生活のため」「今を生きるため」といった理由から農園で働くと言っており、コーヒー栽培に対する意識の持ち方には違いが見られた。このような違いは、個々人が置かれた経済状況や生活条件に応じて生じるものであり、コーヒー栽培に対する姿勢は一樣ではなく、それぞれの判断や選択の結果であると言える。

以上の考察から、コーヒー栽培に対する意識や向き合い方は世代ごとに特徴を持ち、戦後の経済構造の変化やグローバル化、市場や外部との接点の変容などの時代的な要因によって世代ごとに特徴を持ちながらも、最終的には人々の将来像や仕事への意味付けは個々人で異なっていた。一樣には捉えられない個人が置かれた状況に応じて多様に形成されていることが明らかとなった。

第四章では、持続可能なコーヒー生産の将来像について考察を試みた。調査の結果、フェアトレードという言葉や概念を認識していたのは日本人経営者のみであり、生産者の間では共有されていなかった。このことから、少なくとも調査地においてフェアトレードは生産者の生活向上に直接結びつく制度として機能していないと考えられる。そこで、フェアトレードの代替的な方向性として、スペシャルティコーヒーの生産に着目した。辻村（2009）によると、スペシャルティコーヒーとは、超高品質さによる製品差別化によって国際価格に影響を受けない、高めに安定した価格の実現を目指しているものである。具体的には、SCAA（Specialty Coffee Association of America）の評価基準で 80 点以上の豆である。調査地の農園はいずれも SCAA の評価基準で 80 点以上を獲得しており、超高香味コーヒーとして評価され、高価格で取引されている。A 氏のインタビューでは、日本人経営者と協同してスペシャルティコーヒーを生産したことによって、生活が安定したという旨の回答を得た。この

ように、生産量ではなく品質を重視し、より高品質なコーヒーを生産することは、生産者の生活の安定及び向上につながると考える。以上のことから、ベトナムのコーヒー産業において、持続的なコーヒー生産を実現するには、スペシャルティコーヒーの生産が有効な方向性であると結論付けられる。

とはいえ、スペシャルティコーヒーの生産は容易ではない。カール・ウィンホールド(2024)によると、世界中で出回るコーヒー豆のうち、SCAAで80点以上の豆は5%以下である。要因は、自然環境や気象条件に左右されるだけでなく、焙煎業者が提示する価格で一定量のスペシャルティを継続的に購入する買い手と取引できる保証がない不確実性を伴うことだ。さらに、スペシャルティ焙煎業者向けの豆は、通常より高い価格で販売できる傾向にあるが、生産物グレードに対して支払われるプレミアムは、小売りレベルでの業務用コーヒーとスペシャルティコーヒーとの価格差と比較すると相対的に小さい。このような課題に対し、自然環境への対応は容易ではないものの、取引価格の変動や中間業者の存在によって生産者の手元に残る金額が少なくなってしまうという構造的課題については、取引形態や販売方法の工夫次第で改善の余地があると考えられる。

調査地の農園は日本人経営者の介在の下、海外バイヤーが集う国際イベント SCAJ2025に参加することで、自身のコーヒーをPRしていた。しかし、このような農園はベトナム国内においては稀であり、生産者個人の努力のみによって再現することは困難である。スペシャルティコーヒーの生産及び取引は、資本や市場へのアクセス、評価基準、仲介者の存在といった複数の条件に依存している。そこで、上記のようなイベントを行い、生産者と直接対話することでスペシャルティコーヒーとしての固有のストーリー性を付与し、品質以上の価値を生み出す効果もあるのではないかと考える。市場、評価、情報、交渉へのアクセスを継続的に得ることで、生産者の側もコーヒー栽培との向き合い方を変化させることが可能となる。消費国がこれまで重視してきた最低価格保証を中心とするフェアトレードのような価格への支援から、生産者が取引に参加し、価格交渉へ関与できる市場へ接続する支援へと転換すべきである。調査地の農園では、生産技術以上に、市場構造への機会を獲得していた点が大いだと考える。そこで、消費国が仲介者として関係構築に関与することは、生産者と市場との間に存在する情報や交渉力の格差をなくし、生産者が価格を決定する過程に間接的に関与することが可能となる。その結果、従来の一方的な価格決定による搾取構造や理念的なフェアトレードに依存した支援とは異なり、生産者が主体となることを前提とした取引構造を促すことが可能となると考える。

本研究の意義は、ダラットのコーヒー生産の現場における生産者の語りを通じて、持続可能なコーヒー生産を理念的ではなく、生産者の生活を維持・向上させるための前提条件として捉え、その実現に向けた課題と可能性を考察した点にある。インタビュー調査から、「フェアトレード」という概念を認識していたのは日本人経営者のみであり、多くの生産者には必ずしも共有されていないことが明らかになった。この結果から、善意に基づくとされる取り組みであっても、別の視点から見るとその意義や有効性が十分に共有されていない可能

性が示唆される。本研究を通じて、物事を一つの価値観に依拠するのではなく、複数の立場や視点から検討できる姿勢を持ち続けたいと考えた。

参考文献

- 浅岡柚美 2012. 「ベトナムにおけるコーヒー栽培と流通の現状ーラムドン省バオロクの調査」『流通科学大学研究所報』(06).75-82.
- カール・ウィンホールド 2024. 『スペシャルティコーヒーの経済学』亜紀書房.170-179.
- 新江利彦 2007. 『ベトナムの少数民族定住政策史』風響社.73-106.
- 辻村英之 2009. 『おいしいコーヒーの経済論ー「キリマンジャロ」の苦い現実』太田出版. 130-166.
- Nguyen, T. N. T., & Nguyen, Q. T. 2024. “Cultural Transformation and the Evolution of Festivals: The Impact of Modernization on the K’Ho Ethnic Minority in Vietnam Coffee Cocoa Association (Vicofa) 2025. 「 Cà phê thành ‘đá u tàu’, đưa xuất khẩu nông lâm thủy sản vượt 45 tỉ đô la」 <https://vicofa.org.vn/ca-phe-thanh-dau-tau-dua-xuat-khau-nong-lam-thuy-san-vuot-45-ti-do-la> bid3171.html(2026.1.23 閲覧).